

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 坂口昂吉君提出学位請求論文審査要旨   |
| Sub Title        |   |
| Author           |   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 2000  |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.70, No.1 (2000. 9) ,p.119- 122   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 彙報  |
| Genre            | Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20000900-0119</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙報

## 坂口昂吉君提出学位請求論文審査要旨

論文題目「中世の人間観と歴史——フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントウラ——」

キム・ボナヴェントウラ——」

### 論文審査の要旨

坂口昂吉君が提出した学位請求論文『中世の人間観と歴史——フランシスコ・ヨアキム・ボナヴェントウラ——』（創文社、一九九九年二月刊）は、同君が過去約四十年間に発表した論文から十編を選んで加筆訂正し、それに新たに執筆した全体の見取り図ともいふべき「序論」を加えてまとめたものである。本書の構成は以下の通りである。

### 序論

I 中世における人間観の発展——アウグスティヌスからフランシスコへ

II 中世における歴史観の発達——アウグスティヌスの終末論からヨアキムの新しい歴史神学へ

第一章 フランシスコ会の創立をめぐる

第二章 アシジのフランシスコと宗教運動

第三章 アシジのフランシスコとカタリ派

第四章 フランシスコ会の教団組織について

第五章 フランシスコ会における党派対立の原因について

第六章 ボナヴェントウラとアリストテレス哲学の關係

第一節 若き日のボナヴェントウラとアリストテレス哲学の關係

第二節 晩年のボナヴェントウラとアリストテレス哲学の關係

第七章 ボナヴェントウラのフランシスコ伝について

第八章 ヨアキムの歴史神学とスコラ学者——トマスとボナヴェントウラ

第九章 ボナヴェントウラの歴史神学とフィオレのヨアキム

第十章 ボナヴェントウラの歴史神学におけるキリストの位置

西洋中世における修道会の歴史は、社会的・経済的な文脈において考察の対象となるだけでなく、政治的あるいは思想的な文脈においても興味深い考察の対象である。しかしその研究には該博な知識と透徹した分析力を必要とする、きわめて研究の困難な領域である。この領域で坂口君がこれまでに果たしてきた役割は小さくない。同君がこれまでに発表してきた多数の論文は、対象をその内面にある宗教理念の深部へと分け入って内在的に理解しようとする姿勢に貫かれている。中世哲学、神学の素養に基づいて中世の教会の内実にせまろうとしてきた同君は、中世教会史研究のあるべき姿のひとつとして高く評価さ

れている。

本書に収められた十編の論攷はその研究の対象領域からみればいずれもフランシスコ会の歴史にかかわる研究であるということができ、主題から見れば、著者自身が「序論」に記しているように、二つの主題に大別することができる。ひとつは人間観の変化であり、もうひとつは歴史観の変化である。この変化は、著者が説得的に明らかにしているように、たんなるフランシスコ会の歴史の中での現象ではない。西洋が古代から近代へと変貌する過程で生じた理念の変換である。したがって、この意味では、坂口君の研究はフランシスコ会の研究というにとどまらず、西洋の歴史全体を視野においた研究であるということができ、いいかえれば、フランシスコ会が西洋近代の形成において決定的に重要な役割を果たしているとの主張である。

第一の主題である「人間観の変化」とは、古代的な身体観から近代的な身体観への変化はその最初の形態をアシジのフランシスコにおいて認められるということである。このために、第一章から第五章までは、フランシスコ会の発展、フランシスコの歴史の実像とその生の理念の解明にあてられている。もう一つの主題である「歴史観の変化」とは、次のような主張である。「いま」の時代の次に新しい時代の到来を期待することは近代的な歴史観の一つの特徴であるが、このような歴史観は、キリスト以降終末に至るまで等質な時間が経過すると考えるアウグスティヌスの歴史観と対照的である。このような近代的歴史観

に思想的基礎づけを与えたのはヨアキムの予言的歴史神学とその影響を受けたボナヴェントゥラである。第六章から第十章までは、こうした思想的展開の解明にあてられている。

このような近代的人間観と歴史観は、その内実を目を向けるならば、一種の緊張関係にあると思われる。身体をともなった人間に宗教的な意味での尊厳を認めることが、歴史の実在としての十字架のイエスとの宗教的な出会いの経験に支えられているとするなら、このような人間観は歴史的な存在としてのイエスに決定的な重要性を認めることになるであろう。ところが近未来に新しい時代の到来を予想する歴史観は、キリストの時代である「いま」が新たな原理に基づく時代に置き換えられることを主張する歴史観だからである。キリストの時代の次に聖霊の時代を予告したヨアキム主義は、坂口君の研究が明らかにしているように、まさにそのような立場を明確にした歴史観に立っている。坂口君の研究の優れた着眼点は、近代的な人間観と歴史観という二つの理念の緊張が互いに刺激しあいつつも融合し、現実化する場として、制度的な修道会あるいは教会を捉えようとする点にある。

「清貧」の生活を主張したと一般にいわれているアシジのフランシスコについて、坂口君は先行研究の批判と『第一伝記』『第二伝記』および『遺言の書』の丹念な比較分析から、「彼の回心が一般的な意味で俗世を離脱することであって、特に清貧の固執するものではなかった」(37ページ)と指摘している。このようにフランシスコの宗教性は、制度的な理念よりもむしろ

ろ人間となつたキリストへの生き生きとした愛を中心におき、それが聖体への愛につながりをもち、ひいては教会への畏敬と服従につながつたところにあり、それゆえにこそ、フランシスコは教会内の志向を保ち続けることができ、「従来の同種の修道団体のごとく、人里離れた場所に隠棲したのではなく、世俗社会の中にあつてこの理想を実現させんと」(120ページ)することができたのであつた。フランシスコの兄弟的同志愛という理念は、それが急激な現実の変革を意図するものではなかつたがゆえに、かえつて社会的理念の変革をもたらしたと考えられる。

理念にかかわる問題を歴史史料の分析から読みとる坂口君の手法は、本書のもう一つの主題である「歴史観の変化」を論ずる中でも、成果を生みだしている。特に注目に値するのは、ボナヴェントウラは最初からアリストテレス哲学の敵対者であつたのではなく、むしろ彼に好意的であり、アリストテレス哲学が自説の反対者であることを意識するようになったのは晩年である(191ページ)という指摘、および「ボナヴェントウラは、ヨアキムの歴史神学からその夢幻性と無秩序を除去し、現実味を帯びた改革思想にかえ、また歴史の焦点を未来における聖霊の時代から、旧新約の中心となるキリストに置いたのである」(239ページ)という指摘である。一方で哲学が啓示神学に吸収されるであろう新時代を予測しつつも、それをヨアキムのように教会と社会の全面的刷新という過激な歴史観へと発展させなかつたのは、ボナヴェントウラの実践的な教会指導者としての

性格に起因するものであろうと結論づけている。一見平凡とも見えるこの結論は、しかし、ボナヴェントウラがアウグスティヌスの歴史観、すなわちカトリック教会の歴史観を内から変革したことを意味している。

次に本書の残した課題について触れる。西洋古代から近代に至る過程で起こつた人間観の変化が、キリスト教によるものであることはすでに多くの研究が指摘するところであるが、本書はアシジのフランシスコの回心が、いわば歴史の転換点であることを主張している。すなわち「癩者において十字架のキリストを見る」という宗教的経験が、人間の尊厳という理念を生み出したと主張している。しかしながら、イエスが弱いものの姿をとつて現れるという伝承はキリスト教の中でも、古代から様々な形で存在しているのであり、ある意味では他の宗教的伝統の中にも類型を認めることのできる伝承である。フランシスコの回心がなぜ人間観の変化をもたらしたのか。同様に、この地上に新時代の到来を待望する歴史観も、著者自身が指摘しているように、すでに千年王国説の名のもとで古代においても認められるのであるから、ヨアキム主義がボナヴェントウラの思索を介して西洋の歴史観を変革するまでの影響を及ぼすことができたのはなぜであろうか。そして、このような二つの変化が、フランシスコ会やカトリック教会の枠を超えた大きな精神運動を形成しえたのはなぜであろうか。それと同時に、この大きな精神運動の裏側には、近代ヨーロッパが抱えてきたさまざまな問題が内包されていたのではなからうか。また、フランシスコ

の内面的な精神性はまことに見事に論じられているが、それがこの時代のさまざまな社会状況とどのように関連し、それがどのように具体化されていったのかについては触れられていない。さらに、「人間観の変化」にしても「歴史観の変化」にしても、フランシスコ修道会以前の、特に十二世紀（十二世紀ルネサンス）における展開についての考察が欠如していることは惜しまれる。

以上のように、若干の課題が残っていると思われる。とはいえ、本書はフランシスコおよびフランシスコ修道会を対象とした我が国最初の本格的な研究であり、しかも、フランシスコに始まる宗教的・社会的運動およびそれに関連する諸課題について、その根源にある宗教理念から内在的に明らかにしようとする試み、それに見事に成功している。よって、同書は、高く評価されるべき内容のものであり、博士（史学）の学位を授与されるに十分値すると判断する。

論文審査担当者

|         |             |             |
|---------|-------------|-------------|
| 主査      | 慶應義塾大学文学部教授 | 清水祐司        |
| 副査      | 早稲田大学文学部教授  | 野口洋二        |
| 副査      | 慶應義塾大学文学部教授 | 中川純男        |
| 学識確認担当者 | 慶應義塾大学名誉教授  | 博士(史学) 東畑隆介 |